

アフガニスタン戦争とは一体何だったのでしょうか？

アフガニスタンから米軍がアタフタと撤退しました。

撤退期限前日に最後の輸送機がフレアー（赤外線追尾のミサイルから防衛する装備）を撒きながら飛び去って行く様は、まさに最前線からの命からがらの離脱を彷彿とさせました。後に残ったのは混沌と悲劇だけです。一体この20年に及びアフガンでの戦闘は何だったのでしょうか？

そもそも米国がアフガンに介入する切っ掛けとなったのは、2001年9月11日の同時多発テロでした。

しかし、この911同時多発テロも謎の多い事件でした。

911 同時多発テロの謎

私は新しく発行された雑誌を買うのが好きなので、本屋で新刊誌を手にとると前から見たり後ろから見たりします。たいていの雑誌には最後の方に編集後記の様なものが載っており、編集者の考えや空気感のようなものが伝わって来て、編集方針や意図などが感じられ購買の参考となります。

さて、この20年前の事件を時系列的に後ろから追っていったらどうなるのでしょうか？

c.ピッツバーグ郊外の地面に巨大な焼け跡が発見される。（しかし、飛行機の残骸は見当たらない）

b.ワシントンの国防総省のビルから煙が上がっている状況がテレビに映し出される。（飛行機が追突したとの報道はあるが、衝突時や直前の映像は一切無い）

a.ニューヨークの世界貿易センタービルに旅客機が追突する様子がライブ映像で世界中に報道される。

a.からc.の順に見ていくと、旅客機がハイジャックされて建物に激突した事がストーリーを持って理解出来るが、逆にc.から見ていった場合、このストーリーが理解出来るでしょうか？

？、？が続いてa.に至って初めて真相が理解出来る。

世界貿易センターに旅客機が激突する様子は何百回（おそらく世界中で何千回）も繰り返し報道されているが、何故かペンタゴンへの衝突に関しては一切報道が無い。

ペンタゴンを見通せる位置に設置されていた民間の監視カメラの記録も当局に持ち去られ一切公開されていない。（唯一衝突直後の壁面から火炎が吹き上がる映像は公開されているが、その映像からは衝突したのが旅客機である事は認められない。この0.何秒か前の映像なら旅客機の尾翼部分だけでも映っていたかも知れないのに。）

ニューヨークの事件ではニューヨーク上空を異常な低空で飛ぶ旅客機の姿が記録されてい

るが、ワシントンの事件ではワシントン上空を異常な低空で飛行する旅客機の記録は無い。

ここに不気味な絵が在る



< 出展：新潮文庫 ク 28 7 >

ワシントンにある国会議事堂に突入するジャンボジェット機

これは、トム・克蘭シーのジャック・ライアンシリーズの一編で在り、これにより主人公のライアンは棚ぼた的に米国の大統領になってしまうのであるが・・・何故ジャンボジェット（日航機）が国会議事堂に神風攻撃を仕掛けたかは、その前作の『日米開戦』（新潮文庫 ク 28 1）という、現地調査もろくにせず適当に書いた小説を読むしか無いのだが・・・
兎に角、小説の内容はどうでも良い。この小説が刊行されたのは1994年から1996年であり、同時多発テロの5年以上前で在り、旅客機によるテロの危険性は一般の人でさえ見さ

れた筈である。何故易々と首都の中核部分への侵入を許してしまったのか？
事前に予見出来て米軍も何らかの防御対策を立てられた筈であるが・・・

私はこの同時多発テロがあった時、米国の報道の方が良いと思い深夜から明け方近くまで CNN テレビをずっと見ていたが、途中でアフガニスタンからの報道に切り替わった。この時は映像を伴った報道は無く、現地特派員からの音声による報道のみで、「北部同盟とタリバンとの戦闘は無く、現地は平静である。」との報道のみであったが、何故 CNN テレビは同時多発テロとアフガニスタンのタリバンとの関係をいち早く知ったのであろうか？

ウサマ・ビン・ラディンの謎

事件は早い段階でイスラム過激派テロ組織アルカイダが実行したものとされ、アルカイダを指揮するウサマ・ビン・ラディンが首謀者とされた。

そして、タリバンがこのアルカイダの背後に居るとの三段論法で米国はアフガンへの派兵を決めたのでした。

しかし、アルカイダやタリバン側からはこの事件に関する動きが余り見えてこない。彼らの立場から見ればハイジャック犯は米国に大打撃を与えた英雄的殉教者であり、後に続くムジャヒディン（戦士）達を鼓舞するプロパガンダとして、もっと喧伝されても良いように感じますが、その様な情報が流れてこない。

次に私個人の印象なのですが、このウサマ・ビン・ラディンという人物からはカリスマ性が見えてこない。普通、狂信的な組織の指導者には、その言動や風貌などに何らかのカリスマ性を帯びているものですが、このビン・ラディン容疑者を見て、何処かの気の良い小父さんという印象を受けることはあっても、人を陶醉させるような雰囲気を感じられない。

テロの実行犯達に文字通り命を捧げる様に命令する訳ですから、この人の命令に従って命を捧げると、心酔させるような魅力が無ければならないと思うのですが・・・

9.11 事件の当日ビン・ラディン容疑者の親族は米国に滞在していたとのことですが、何ら取り調べを受ける事も無く出国したとのこと。

その後ビン・ラディン容疑者は 2011 年に米国の特殊部隊に攻撃され殺害されたとの事ですが、殺害して海に捨てたとの米国の発表だけで、明確に死亡した事を示す具体的な情報が無いように思います。

リメンバー〇〇

よく日本人は平和を愛する民族で在り、二度と戦争はしないーと言われますが、平和を愛して戦争を忌避するのは日本人だけではなく、世界中皆そうです。

この平和を愛し戦争を忌避する人々を戦争やむなしと考え方を変えさせるためには強烈なインパクトが必要となります。

米国にとってこの原体験となったのが、メイン号事件でした。

南北戦争という内戦により、欧州列強に海外進出で遅れを取った米国は、自国の発展のためカリブ地域の安定と太平洋方面（ハワイ、グアム、フィリピン、そして最終的ゴールは中国）への進出を模索します。

しかし、悲惨な内戦に懲りた米国民にとって外国との戦争など望むべくもありません。

その時起こったのが、キューバのスペインからの独立運動でした。

不安定なキューバ国内に在住する米国人を保護するため、米国は戦艦メイン号をキューバに派遣します。しかし、このメイン号がハバナ港で謎の大爆発を遂げて沈没してしまったのでした。

私はこのメイン号の爆沈は偶然の事故で在り、事件性は無かったのでは無いかと思いますが、イエロージャーナルと呼ばれるアメリカの新聞紙は、これをスペインからの攻撃（どの様にメイン号を破壊したかをイラスト入りで解説したりしました。）であると根拠の無い報道を繰り返し、米国市民を焚き付けます。

これらの報道に煽られた市民感情は「リメンバーメイン！」を合い言葉に、一機にスペインとの開戦に傾いていくのでした。

（この事件により米国の新聞社は売り上げを大いにのぼし大儲けします。その代表者がピュリッサーや‘新聞王‘ハーストです。ピュリッサーは儲けた金でピュリッサー賞を創設し優れた記事を書いた記者を表彰する制度を作りました。良質の記事の中に自分達のガセネタを紛れ込ませ、如何にも自分達の記事が良質の記事であったかの様に装います。実に巧いやり方です）

この米西戦争（1898年4月～1898年12月）により、米国はスペインからフィリピン、グアムを割譲させ、キューバを米国の半植民地にする事に成功し、当初の戦争目的を全て達成します。

最初は偶発的の事故に過ぎなかった本件から、アメリカ政府は多くの事を学びます。

『戦争に否定的な市民感情を好戦的な市民感情に切り替えるには、先ず相手に攻撃をさせれば良い！』

これ以来米国の戦略は先ず相手にファーストストライクを取らせる。そして、それをリメンバー〇〇として市民感情をヒステリックに煽り戦争に導いて行く。と言う形を取って行くこととなります。

リメンバー911！という言葉は聞きませんが、実はこの911とは米国民にとって馴染みの言葉なのです。

日本では救急車を呼ぶ時119に電話しますが、米国と日本では何でも逆なので、米国では911です。交差点で事故が発生したら、取り囲む野次馬から「ナインワンワン！ナインワンワン！」の大合唱が起こります。

ですから911は米国民の記憶に残り易い数字なのです。

宗教

それでは、自分達の戦争目的のため、無垢の人々の命を奪う事が出来るのでしょうか？

それは、彼らなら出来るのです。

満州事変の発端となった柳条湖事件では中国軍により南満州鉄道の線路が爆破された一として開戦となったが、勿論関東軍の自作自演の事件です。

線路が爆破されたと言っても、線路の上で花火を燃やした様なもので、ほとんど損傷は無く、その直後に急行列車が何事も無く通過しています。

しかし、これをかの国が行えば、急行列車ごと爆破し、列車の乗客乗員に多数の死傷者を出した事でしょう。（その3年前の張作霖爆殺事件では関東軍は容赦なく張作霖の乗った列車を爆破している。）

もし日本人に多数の犠牲者が出ていたら、日本国民はヒステリー状態に陥り、声高に中国との開戦を求めた事でしょう。

しかし、それは出来ないです。その原因は宗教に起因します。

一般に日本人は無宗教だと思われているが、それは違う。

日本人は『言霊信仰』や『怨霊信仰』を信じる徒なのです。ただ、余りにも生活習慣と一体化しているため自分が信仰していると気付かないだけなのです。

この辺の所は、井沢 元彦先生の著作を読めば理解されると思います。

満鉄の急行列車を爆破して世論を喚起しようとしなかったのは、張作霖を殺せても日本人を自らの手で殺せなかったのは、同朋に対する優しさでは無く、日本では不幸にして死んだ人間は怨霊となる一とする怨霊信仰が在るためである。

無垢の同朋を殺せば多数の怨霊が発生する事になり、その後の戦争遂行に影響が出ると恐れるからです。

しかし、キリスト教の世界では怨霊信仰は在りません。

そして、イスラムの過激派テロ組織をイスラム原理主義者と呼ぶように、キリスト教徒の中にもキリスト原理主義者と呼んでも良いような過激な人達が存在するのです。

中性の十字軍の戦士の様に、彼らは心底イスラム教徒と戦う事が聖戦だと信じているのです。

古代では戦争を始める前に祭壇を作り、犠牲を捧げて戦勝を祈願するのが普通に行われる風習でした。ここでは自分の大切な物を神に捧げる事により戦士の心を一つにしたのです。聖戦を始めるためには、多少の犠牲はやむを得ないと考える人が居てもおかしくはありません。

タリバンとの戦争は共和党のブッシュ大統領の時に始めた戦争ですが、民主党のオバマ大統領の時にビン・ラディン容疑者を殺害して一つの幕を降ろそうとしたり、今回バイデン大統領が短兵急にアフガニスタンからの撤退を決めたり、共和党と民主党で対応に大きな違いが在ると思います。それは両党の背後の支持母体の違いかも知れません。

アフガニスタンの今後

米国はタリバンを駆逐し、アフガニスタンに民主的な体制を築こうとしました。しかし、民主主義を根付かせるためには、社会に中間層（ブルジョア層）が育っていることが、絶対的に必要な条件なのです。一部の特権層と貧困層だけの社会では、いくら制度を持ち込んでも民主主義を定着させる事は出来ないのです。逆に言えば、民主主義的制度を外部から持ち込まなくても、中間層が育って社会的に力を得れば、民主主義は自然に発生するのです。

米国は敵の敵は味方の論理で、タリバンと敵対していた北部同盟に肩入れしたのですが、この北部同盟も米国が期待した程クリーンな組織ではありませんでした。米国からの支援は汚職の中に消え、民衆に届く事はありませんでした。

アフガニスタンの国民は汚職に塗れた米国支援の政府より、クリーンなタリバンを選んだのでした。

これは、かつて中国大陸やベトナムで失敗して来た事の繰り返しです。この点に関して米国はちっとも学習していない。

今後アフガニスタンは世界で最も貧しい国々に仲間入りする事でしょう。

しかし、豊かな物に恵まれていなくても幸福感の高い国は在ります。

宗教に殉じて清貧を貫けば良いのでは無いかと思います。ただ国民の不満をテロという形にねじ曲げて解消しないよう願うばかりです。